

第二十回大会を終えて

北東北支部部長 栗原 靖

弘前は当学会発祥の地です。昭和五十四年に「東北比較文化学会」として第一回大会が弘前学院大学で開催されています。

詳細は同学院大教授佐藤幸正「日本比較文化学会二十年の経緯」芳賀馨編『比較文化論叢』開文社出版一九八九年所収をご覧ください。

懇親会で、「緋色の海の幻」を見せて下さった劇団夜行館の笹原茂朱さんは、初期の頃、この学会でしばしば発表なさっていた方ようです。これは二十回大会への最高のプレゼントでした。

シンポジウムでは狩野不二夫さんがニュージラランドから参加して下さいました。国際化の時代に日本語教育その他のために努力なさっている各地の気鋭の論客たちには頭がさがる思いがします。

講演会は開催校弘前大学学長に御願いしました。大学改革でお忙しい最中に、こころよく引き受けて下さいました。

米沢暢子さんの「津軽ごきん刺しによるタペストリー」の展示発表はいかがでしたでしょうか。こういう形式の発表も今後いろいろあっていいと思います。

いずれにしましても、比較文化学会第二十二回大会を無事、終えることができた。行き届かない所はいろいろあっただろうと思いますが、御協力いただきました。会員のみならず、その他のみなさまにこころからお礼申しあげます。以上。

《第二十回大会総会報告》

一 報告

庶務報告

(1) A 『比較文化研究』発行について

35、36、37号を発行

B 主な送付先

国立国会図書館、HARVARD YENCHING LIBRARY、郵政省郵務局、論説資料保存会など。

(2) 第二十二回大会について

A 開催校 久留米大学

B シンポジウムのテーマ

「国際化の中の日本再考—アジアを中心として」

(3) A 第17期日本学術会議第一部文化人類学・民俗学研究会第一回文化人類学・民族学研究会連絡委員会報告

B 第17期日本学術会議第一回文化人類学・民族学研究会連絡委員会報告

(4) 「会長奨励賞」 栗原 優に決定

支部・部会報告

A 関東支部報告

関東支部例会開催(97・12・13)

B アジア文化研究会報告

第二回アジア文化研究会 於ビクトリア ユニバーシティ オブ ウェリントン(ニュージラランド)(98・10・31)(11・2)

『比較文化研究』38号(特集号)を編集・発行(98・4・30)

C 日本語教育研究会報告

『比較文化研究』(日本語教育研究部会特集号No.1)を編集・発行(98・6・1)

D 社会言語学研究会

『比較文化研究』(社会言語学特集

号)の原稿を左記の通り募集集中、投稿規定『比較文化研究』の投稿規定に準ずる

一、論文のテーマ 社会言語学に関するものならば、何でも可

一、原稿送付先

(大学) 板橋区高島平一—一九一

一 大東文化大学外国語学部英

語学科 栗原 優

(自宅) 浦和市領家六一—四一

三一 栗原 優

(封筒に「原稿在中」と朱書)

一、締切 右に問い合せ下さい。

二 議題

1 『比較文化研究』編集について

(1) 編集委員の変更

前田達郎委員の死に伴い、佐藤憲和(弘前大)を新委員に追加

(2) 特別会計の件

引き続き、『比較文化研究』の編集・発行に伴う収支報告をすることになった。

(3) 『比較文化研究』奥付の訂正

郵便番号・振替口座番号の変更に伴い、新しい番号に訂正

2 第22回大会について

A 開催校 関東支部主管(大東文化大学を予定)

B シンポジウムのテーマ 未定

3 会費納入促進と会員名簿について

(1) 五ヶ年(94年度~98年度)に渡る会費未納者は退会扱いとなる。

(2) 会費納入方法について

継続審議となる。

(3) 編集補助費の増額について

4 アジア文化研究会第二回大会

大会に参加を希望する者は、発表の

レシメを部会宛に送ることになる。5 会計報告 別紙の通り、承認される。

《本部事務局だより》

1 入会希望者へ

本学会に入会を希望する方は、本部事務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお送り致します。入会申込書は本部事務局および各支部に備えてあります。

2 論文掲載希望者へ

学会誌『比較文化研究』は年に四回発行しております。掲載を御希望の方は左記へお問い合わせ下さい。

(三月末日〆切)

〒八五四—〇〇八一 諫早市栄田町一〇五七 長崎ウエスレヤン短大南川研究室 日本比較文化学会九州支部

電話 〇九五七—二六一—二三四

(五月末日〆切)

〒三七〇—〇〇六八 高崎市昭和町53 新島学園女子短大内 日本比較文化学会関東支部

電話 〇二七三—二六一—一五五

(九月末日〆切)

〒九六〇—一二四七 福島市光が丘一 福島県立医科大学 外国語講座内 日本比較文化学会南東北支部

電話 〇二四—五四八—二一一一

(十二月末日〆切)

〒六〇二—〇〇三三 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学文学部石黒研究室内 日本比較文化学会関西支部

電話 〇七五—二二二—二二二

〒一〇〇—〇〇〇〇 東京都千代田区千代田 千代田区立千代田小学校 千代田区立千代田小学校 千代田区立千代田小学校

電話 〇三—二二二—二二二

電話 ○七五二一五一一四〇二六

3 学会紙「比較文化会報」に近況報告、支部活動報告、研究部会報告、新刊紹介等で投稿なさる方は、左記の要領でご応募下さい。

(1) 近況報告

縦書 十八字×七行

(2) 新刊書、編注書等の紹介

近況報告の場合と同じ

(3) エッセイ投稿

縦書 十八字×三十行

(4) 支部報告、研究部会報告

縦書 十八字×六十行

投稿×切日 毎年七月三十一日

投稿先 千九六〇一―二四七 福島市
光が丘一番地 福島県立医科
大学数学講座 楠 純一

第二十一回大会案内

時 一九九九年六月十二日(出)

開催校 久留米大学

問合先 千八五四―〇〇八一 長崎県諫
早市栄田町一〇五七
長崎ウェスレヤン短期大学南
川研究室

日本比較文化学会九州支部

電話 ○九五七二二六一―二三三(代)

FAX ○九五七二二六一―二〇六三(代)

研究発表希望者へ

(1) レジューメをワープロなどで、B5版

横書一枚にまとめて下さい。その際

左右の余白を二センチほど残して下

さい。

(2) 一九九八年十二月三十一日必着で、

上記九州支部宅へ書留で送って下さ

シンポジウム講師の推薦

第二十一回大会のシンポジウムのテーマは「国際化の中の日本再考―アジアを中心として」です。各支部は十月二十一日(出)までに講師を御推薦下さい。推薦された講師は、上記研究発表(1)および(2)の要領で、レジューメを書留で九州支部宅にお送り下さい。

会員新刊紹介

芳賀鑿編『比較文化学論纂』開文社(一九九八年)

Kawamoto, Yumi: *Nature of Feature-Driven Movement*. Eihosha, 1997.

植原映子『異文化理解と言語教育』上下

二巻 あさを社(一九九七年)

ロバート・L・アイルズ著 引地岳雄訳

『よりよい医学英語論文を書くための12

のステップアップ』メジカルビュー社(一九九八年)

石黒昭博著 山内信幸編『日英対照文法

研究の諸相』英宝社(一九九八年)

受贈図書

(一九九七年四月―一九九八年三月)

『日本教科教育学会誌』第20巻第1号(一九九七年六月)、第2号(一九九七年九月)、第3号(一九九七年十二月)、第4号(一九九八年三月)

素直に慶賀したい。設立以来学会に関ってきた人々のサービスによって、学会としては安い会費で運営出来たことを感謝している。もっともサービスという美名のもとで支払われる犠牲の代価が大きいことを私は強く認識している。本学会は他の学会に比して運営を本部事務局だけで遂行するのではなく出来るだけ各支部又は各支部会に依存している。このシステムは概ね定着した。また、「研究」発行に当っては、受益者負担の原則も維持されている。六月十二日の役員会で話題になった会費集めの問題も、上述の本学会の経緯との関連で解決したいと思う。所謂「小さな中央政府」的発想から言えば、各支部が支部費・中央費を集め、中央費だけを本部事務局へ送付する方法がよい。ただ支部の事情は画一的でないから、この方法の可能な支部が実施するという柔軟な考え方に当面は委ねたい。

「研究」発行の事務負担も前述した原則に従っている。研究部会に「部会特集」発行の意欲が出て来たのは喜ばしいことであるが、通し番号を付するためには、形式・内容の整備された研究誌としたい。そのため暫らく、編集責任者を会長、部会長は副編集責任者として調整したい。何れにしろ、学会発展のための各方面の努力を私は評価している。

《支部からの報告》

北東北支部活動報告

七・十九 言語文化と映像文化―E・P・ロンテを中心に―

小林 敦子

関西支部活動報告

九・二十 バイリンガリズム研究の現状

祐伯 敦史

視覚的語彙で表わす魔術師の世界―ピーター・グリナウエイの「プロスペローの本」より―

平塚真美子

西田幾太郎とT・S・エリオット―伝統論解釈をめぐる―

中井 展

現代ペーパーバック事情―忘れられた作家と批評の関係

『若草物語』から『ドラキュラ』まで―

中島 剛

色は香へど Part X

釜池 進

十一・十五 『フィネガンズ・ウェイク』

第一巻第五章と「ケルズの書」

田村 章

副詞の扱いをめぐる―文法化(grammaticization)の観点から

山内 信幸

「詰まる」文化と「詰まらない」文化―翻訳を通して見えてくる「他者との出会い」と「母語への目覚め」―

杉山 泰

一・二四 後期のウォルト・ホイットマン

―「民主主義展望」を中心にして―

南浜 満

The Effect of Note-taking on Academic Listening in Japanese as a Second Language

吉村 俊子

ヘミングウェイとキリスト教

小林 敦子

《会長室だより》

会長 芳賀 鑿

本学会が第二十回大会を迎えたことを

三・七 井上 博嗣
経営理念における「和」
山口 美和
子供と言葉 宮本 英男
チョーサーの聴衆 斎藤 勇

南東北支部活動報告

七・十二 今、教育が必要としていること
と 鈴木美恵子
昨今のイタリア事情 上野 龍夫

十・十八 バングラデシュの風俗・結婚式
ハク・ヘダイエトウル
十一・二九 この一年を振り返って
三・十四 ダイアナ妃の死にみる欧州王室の変わりゆく役割

九州支部活動報告
五・十七 支部研究会
講演 昭和期の歌謡曲—その歴史と構造の変化—

宇土 行良
異文化理解を通しての英語教育—その基礎から—
中谷 安男
ヨーロッパにおける東洋の茶
滝口 明子

八尋 春海
八尋真由実
The Portrait of a Ladyにおける家族

福岡県方言アクセントの研究

占部 匡美

雑誌メディアの有害性と青少年女子の意識・行動
野田寿美子

白楽天の新楽府について 静永 健
唐代の女流 詩人 劉 丹

十一・二九 支部研究会
講演 江戸期の古学について
梅田 和郎

グラバー研究の諸問題

本馬 貞夫

日本植民地時代の台湾公学校
の教科書研究 蔡 錦雀
韓国の公立小学校における英語教育の現況 金森 強

アジア研究部会活動報告

十一・十七 バネルディスカッション
「日本、内蒙古そして香港—
現代東アジアの三部物語—」
於香港大学
司会 鹿島英一、季晶

茶論

本場のジャム作りに挑戦中!

芳賀 文子

近年のピン入りジャムのラベルには「開栓後はお早くお召し上がり下さい」或は「冷蔵庫で保管して下さい」とある。ジャムがジャムでなくなつて久しい。林望氏の著書「イギリスはおいしい」にジャムについて「あれは本来はかない命の腐り易い果物を保管するため、防腐剤であるところの砂糖と一緒に煮たものにはかからない」と書かれている。

そのとおり、しかも非常にわかり易い。ジャムにはいちご、りんご、ぶどうなどの甘酢っぱい果物が適している。果物に含まれる炭水化物の一種ペクチンの凝固性を利用し、ゲル化に必要な糖と酸を加えてペクチンゼリー、つまりジャムができるのである。この時糖は果物の五〇

七〇%、酸は〇・五〜〇・一%が良いとされ、酸味の少ない果物ではレモン汁を加えて固さ、甘味をほどよく調整する。北欧諸国でジャム作りが盛んになったのは、ナポレオンが甜菜(さとう大根)の栽培を奨励した十八世紀以降のことである。日本ではパン食が広まった大正・昭和の初期にりんごやいちごのジャムが作られた。現在は国民の多くがパン食になじみ、ジャムの種類も増えたが、すべてに甘さ控えの昨今、ジャムも例外ではない。砂糖の量は一〇〜二〇%位であるか。そのためにペクチンや有機酸を加え、人工的にゲル化させたゼリーである。防腐剤の役割を果糖糖は不足し、保存期間は短くなる。

現代に生きる私が不満を言ってもはじまらない。砂糖のカラメル化した香ばしさやこくのある本場のジャム作りを決心した。果物の熟成度、砂糖やレモンの分量、加熱の加減等々、私の意図するジャム作りは難しく、面白くもある。

(元郡山女子大学教授 調理学)

《編集後記》

パーティや結婚式で、スピーチが長くなって、そのために全体の印象が悪くなることがある。鈴木健二氏の「気がばりのすすめ」(講談社)によると、「人間の話しというものは四十五秒以内にとまったものが一番よくわかるのである」という。したがって、「テレビやラジオで流すニュースも、一つのテーマ、一つの用件は四十五秒以内にとめるのが理想で、二分を超してはならない」という。

飯にスピーチを「起、承、転、結」で一つにまとめるなら、それぞれの部分を四十五秒以内にすれば、全体で百八十秒以内つまり三分以内である。

一方日常の会話は、スピーチのように聞くだけの一方通行でなく、自分も会話に加われるから、話しが違つてであろう。

井上ひさし氏の「自家製文章読本」(新潮社)によると、日常の会話は「発語量の七〇%までが無駄な受け答えである」という調査(クロード・シャノン)もある。無駄がなくなると会話をするとき命がけの緊張を強いられる。それでは神経がまいてしまふ」という。

テレビドラマで、若い男女や熟年同志の素晴らしい会話のシーンを目にする。ことがある。書き留めておいて日頃の会話の足しにと思ふ。

原稿をお送り下さいました先生方、有難うございました。

上のタイトル「茶論」はさろん(サロン)です。芳賀会長が日頃サロンとこの学会を同義語のように言われていることからヒントを得て、エッセイのタイトルとしました。(比較文化研究24号 サロンと学会) エッセイの投稿も大歓迎です。

(楠 純一)

